

明治10年の創立以来、東京大学では多くの学術標本が蓄積、研究されてきました。この貴重なコレクションの管理・運営・継承を担いつつ、学術標本コレクションのさらなる充実と、最先端の研究およびその公開発信に努めています。この一環として、日本進化学会主催による「生物の進化と多様性」をテーマに、東京大学にある2つの博物館の融合から今回の特別展が実現しました。標本・資料を扱った様々な進化・多様性分野の研究に触れながら、博物学に対する幅広い興味や科学する心を抱いてもらえたら幸いです。

### 「哺乳類の胎子液浸標本」「コウモリの成長過程標本」

東京大学総合研究博物館、武蔵野美術大学では脊椎動物の身体構造の進化や成長の秘密、そして美を追求する研究が進められています。ここでは両機関の博物学的、比較解剖学的、美術解剖学的研究に供されてきた様々な哺乳類の希少な胎子標本や骨格標本を展示しています。

＝小藪大輔(武蔵野美術大学造形学部・前東京大学総合研究博物館/比較解剖学・哺乳類学)

### 「日本産チョウ類標本」

東京大学駒場博物館と東京大学総合研究博物館に収蔵されている昆虫のうち、日本産チョウ類の代表的な種の標本を展示しながら、翅の色・形の多様性を示すとともに、これらのチョウ類を用いた分子系統解析の結果などを紹介します。

＝矢後勝也(東京大学総合研究博物館/昆虫自然史学・保全生物学)・折茂克哉(東京大学駒場博物館/博物館学)・伊藤元己(東京大学駒場博物館/進化学・多様性生物学)

### 「現生・化石貝類標本」「アンモナイト・オウムガイ類標本」

現在生きている種には祖先があり、それら進化の歴史は化石記録を調べることによって推定することができます。地質時代を通じた形態変化、現在では存在していない形状の化石種について紹介します。

＝佐々木猛智(東京大学総合研究博物館/貝類学・古生物学)

### 「東京大学総合研究博物館人類先史部門収蔵古人骨コレクション(縄文～古墳時代)」

本学名誉教授の鈴木尚が中心となって収集した貴重な古人骨の資料を紹介します。日本人研究に不可欠な資料として今日でも活用され続けています。骨に残存する核DNAを用いた集団形成史だけではなく、様々な研究から進化の背景となる適応戦略についても明らかになってきました。

＝米田 穰(東京大学総合研究博物館/先史人類学)・佐宗亜衣子(東京大学総合研究博物館/古人骨考古学)

### 日本進化学会 市民公開講座(特別展関連イベント)

#### 『博物標本から進化を語る』

開催日時:2018年8月25日(土) 13:00～15:00

会場:東京大学駒場キャンパス13号館1323号室

入場料:無料(申込不要) ※講演終了後は駒場博物館の展示場にてギャラリートークを開催します。

近年に見られる多くの学術分野では、専門性を追求するあまりに対象の極度な細分化やマイクロ化が進行しています。その一方で、知覚的・体感的に接することのできるマクロ的事象を扱った先端研究も、今なお重要な分野です。博物館にはマクロレベルの学術標本が数多く収蔵されており、このような標本に関わる先端研究ができることこそ、博物館での研究は学術的な魅力の一端を成しています。今回の公開講座では、博物標本を用いて進化を解き明かす異分野の研究者が、それぞれの研究における魅力を語ります。

### 「ホネから探る動物の暮らしと体作りの進化」

＝小藪大輔(武蔵野美術大学造形学部・前東京大学総合研究博物館/比較解剖学・哺乳類学)

地球上には様々な哺乳類が暮らしていますが、体作りの順番は動物によって異なっているということをご存知でしょうか？動物の赤ちゃんの体づくりの多様性について暮らしの違いという視点から探ってみたいと思います。

### 「日本産チョウ類の分子系統地理:絶滅危惧種のルーツを探る」

＝矢後勝也(東京大学総合研究博物館/昆虫自然史学・保全生物学)

近年の環境破壊は地球温暖化などにより、チョウをはじめとする多くの昆虫が絶滅の危機に瀕しています。今回は絶滅寸前に追い込まれている日本産チョウ類3種の生息状況を紹介しながら、それらの種分化や分布の形成過程などを分子系統解析のデータから考えます。

### 「化石記録から分かる貝類の繁栄」＝佐々木猛智(東京大学総合研究博物館/貝類学・古生物学)

貝類(軟体動物)は全生物の中で最も化石記録が豊富な生物です。そのため、カンブリア紀以降地球上で最も成功した生物であると言えます。貝類の繁栄の歴史を化石記録から辿り、現在生き残っている種と比較しながら紹介します。

### 「歴史系博物館で人類進化を考える:縄文人・弥生人・現代人」＝米田 穰(東京大学総合研究博物館/先史人類学)

博物館は進化を身近に感じる絶好の舞台です。生物の歴史である進化を、歴史博物館で考えることはできるでしょうか？縄文時代や弥生時代の文化の特徴をヒトの進化の視点から考えることで、私たちヒトの生物学的特徴を理解し、これからの姿を考えるヒントを探します。